

# 大地の声に耳を傾ける 上山良子『LANDSCAPE DESIGN 一場を創る』

上野 裕治  
UENO Yuji

長崎水辺の森公園 (photo: 上野裕治)



開学以来平成17年度まで、本学にてランドスケープ・デザインの教鞭を執っていた名誉教授上山良子の作品集である。

上山のランドスケープ・デザインの特徴は何か？ それはサブタイトルにあるとおり「大地の声に耳を傾ける」ということにつきるであろう。上山はことあるたびに言う。「土地の記憶をひもとく」「土地を読む」「土地の歴史を探る」。そして土地の記憶やその土地に関わる人々の営み、その場所の自然を含めた大地の歴史を解きほぐしてゆく。そしてその結果を様々なレイヤーとして重ねてゆく。そのひとつひとつのレイヤーは、解きほぐされた結果が抽象的に再構成され、地形、園路広場、植栽、そして人々が集う様々な装置などのレイヤーとして組み立てられる。これらはときには象徴的な重みを持ち、ときには軽やかに積み重ねられ、象徴性と機能美を持ったランドスケープとして構成されてゆく。

これらのプロセスを上山が持つようになったのは、多分に上山にランドスケープ・デザイン教育と活動の場を与えたローレンス・ハルプリンの影響が大きい。ハルプリンは、人々が五感を駆使して環境をとらえ、「ワークショップ」という形でその結果を街づくりや公園計画に生かしていくという手法を生み出した。(RSVP CYCLE 1969) 現在、各地の街づくり等で行われているワークショップの原点は全てここに至るのである。上山は1970年代にこうしたハルプリンの手法を直接体験し、大きな衝撃を受けたと言っている。上山の一連の作品は、その体験がそのまま現在の作品に反映されていると言っても過言ではない。「場を読む」「人を読む」「時を読む」といった基本的な作業と探求心、旺盛な好奇心、全ての関係者との話し合いと分かち合い。それらが素直に作品に反映されている。

上山は抽象形を良く使う。ストライプ（きたまち・しましま公園、長崎水辺の森公園）、スパイラル（長崎水辺の森公園、トゥロンラッティ湖公園コンペ）、直角格子（芝さつまの道、日立シビックセンター）など、大きなフレームが全体を統括し、その中に上山らしい柔らかな線形が重なってゆく。さらに繊細な表情を持ったデテールが加わり、繰り返し、連続、反転、強調、といったリズム感のもとに全体の風景を織りなしてゆく。繰り返しになるが、これらのデザイン要素は全て「土地の声に耳を傾けた」結果として再構成されている。運河のメタファーとしての水を主役とした舞台装置（シーバンス）、先人達が身につけていた様々な飾りのメタファーとしてのオブジェ群（きたまち・しましま公園、長崎水辺の森公園）、魂のメタファーとしての光のフォーリー（長岡平和の森公園）、井戸のメタファーとしての噴水（芝さつまの道）など、大地の声は様々なメタファー（隠喩）として大地にデザイン展開されてゆく。

上山はランドスケープ・デザインの基本的スタンスとして「宇宙のプロセスを心して受け止めることから始めるべきである」と言う。ランドスケープ・アーキテクトという職業が、地球の大地に何らかの手を加える作業である以上、天と地を結ぶという概念を基本に置くことは当然の帰結といえよう。このような基本的な概念設定がなければ、黙して語らぬ大地から「声を聞く」ことは出来ない。

上山良子、元気いっぱい60代。まだまだ実践家としての今後の活躍を期待したい。

上山良子『LANDSCAPE DESIGN - 場を創る』  
美術出版社、2007年